十干十二支考

営業4部　梶田　誠三

今年の干支（えと）は？　と問われて申（さる）年と殆んどの方が答えることでしょう。あまりあたりまえすぎてそんな質問を投げかけることもない周知の事実と馬鹿にしないでいただきたい。私がこの文章で述べてみたい原点なのですから。

「猿」にも多くの種類がいますよね。先日、新聞を賑わしたヒヒもそうですね。そう、申年にも5種類の申年があって、今年は「みずのえさる」、漢字で書けば「壬申」となります。「壬申」の字を見て、あれ、どこか頭の片隅に記憶として残っている、ぼんやりした霞の存在を曖昧模糊に思い起こそうと努められた方もいらっしゃることでしょう。そんな風に思われた方は筆者の年令を前後する方で、若い方は明確な言葉として鮮明に思い出された筈です。中学から高校時代にかけて何度も学んだ日本史上の大事件、日本の進路を分けた「壬申の乱」のあった年に当るのです。

さて話は一転しますが「還暦」という言葉をご存知ですね。若い人からどうも年寄りくさい話題ばかりで「もう、いやっ」という声が聞こえてきますが皆さんも年寄は誰もが通る道、避けては通れない道であることを思いもう少しつきあってみて下さい。

還暦は60年、なぜ60年で暦は還ってくるのか聞いてみると殆んどの方がしどろもどろの答えしかしてくれません。

答えは、

十　干（幹）　甲乙丙丁戊己庚辛壬癸（甲）（乙）（丙）……

十二支（枝）　子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥（子）（丑）……

両者の組合せで年号等を定めたものです。最初の年は甲と子で甲子の年、次に乙と丑で乙丑の年という風にやっていく訳です。十干は癸で終ると甲に戻り十二支も同様に子に戻って循還します。こうして連綿と組合せていくといつか甲子の年にぶち当ることになります。この組合せがいくつ出来るか、もうおわかりですね。そう60種類になる訳です。ここで又、中学の頃を思い出して下さい。10と12の最小公倍数はいったいいくつでしょうか？

甲子の年と言われて甲子園と何らかの関係があるのではないかと思われた方がいらっしゃると思います。そうです、関係大ありなんです。大正13年（1924）に球場が完成、甲子の年に因んで甲子園球場と命名されたことを知る人もどんどん少なくなっています。地名はそこから派生したものだったのです。戊辰戦争（1868年）も辛亥革命（1911年）も前述した壬申の乱（672年）もこうして固有名詞化されたのです。ちょっと計算してみましょう。今年から60の22回転前、即ち1992－（60×22）＝672年に壬申の乱が起ったのです。

60年から想起されるものとして丙午があります。子供が出来れば生れてほしくないと世に言う丙午は60年に1回巡ってくるのは何の不思議もない単なる組合せの一つにすぎない至極当然のことなのです。ところでかつての新日鉄副社長の藤井丙午さんはきっとこの年に生を受けられたのでしょう。

閑話休題（無駄話はともかく）

十干の読み方、何となくわかりにくそうですが実は大変簡単なことです。中国の五行説に基く5つの星を五行相生の運行順に並べますと、

木　火　土　金　水

木は火を生み、火は土を生み……水は木を生む相生順を採用しています。それぞれの星には兄と弟がいて兄が「え」で弟が「と」両者併せて「えと」となります。木の兄が甲で木の弟が乙、火の兄が丙で……あとは皆さんがやって下さい。今まで何度も出てきた壬だけやっておきます。壬は十干の後から2番目だから水の兄即ち「みずのえ」となります。水の江滝子はこの年の生れに因んで芸名にしたのでしょうか。つまらぬことを考えるのも楽しいことです。

こんなことを書き連らねていると、いつまでたっても終着駅に着きませんのでそろそろまとめに入りましょう。壬申の乱や最小公倍数といった懐しい言葉が出て来ましたが全て私達が中学時代に学んだこと。あの頃は覚えるのは試験の為と考えていたのに実は人生を送る上で貴重な基礎知識を学んでいたのだと今頃になって思うんです。あの頃の教科書が手許にあれば当時の授業風景そして先生の顔を思い浮べながらもう一度繙いてみたいと考えるのも私だけではないでしょう。

十干十二支の基本に循還があった様に世の中の全てが循還しているのです。ヨーロッパ思想が一方通行の進歩史観で壁につき当っている現代、循還の東洋思想の素晴らしさを私に教えて下さった敬愛する梅原猛先生が昨年宮中の歌会始の召人として読まれた歌をしめくくりにさせていただきます。

勅題　「森」

『ものなべて往きては還りまためぐる
森のことわり知るや知らずや』